

台湾出張報告

金子 昭

昨年12月25日～29日、台湾に研究調査のため出張した(科研基盤研究(C)「環太平洋における宗教NGOの国際ネットワークに関する研究」による)。今回は、主に同年8月末に慈済大学(花蓮市)で日台学術研究交流会(「人文臨床と無縁社会」)を企画・開催した流れの上での追加的な訪問調査であった。時間的關係もあって、今回は台北市内で関係者を訪問し、インタビュー等を行った。



中央研究院の余安邦先生の研究室で

民族学研究所の余安邦先生に、台湾における宗教NGOの動向について話を伺い、今後の日台の研究交流のことなどについて意見交換を行った。その後、同研究所付属の博物館を見学した。

27日は、仏教慈済基金会人文志業中心顧問の林幸恵氏、台北市内で慈済人医会の活動に関わっている洪美恵氏(二人とも薬剤師の有資格者)と台北市内で会い、東日本大震災の際の同会の大規模支援や台北市内でのホームレスへの医療支援の状況について話を伺った。



台北市先住民ケア協会・台北神愛教会

28日は、国防大学の曾麗娟副教授と台北市内で会い、台北市先住民ケア協会(キリスト教台北神愛協会が運営)についての研究、またご自身の実践活動(家庭に問題をかかえる児童支援)の話をお伺いした。その後、実際に台北市先住民ケア協会を訪問して丸山陽子副代表に直接インタビューした。同協会には昨年の研究交流会の際、日本側参加者有志と訪れて丸山氏から話を聞いたが、今回はとくに先住民女性が自立生活のために経営している喫茶店で、より詳しくその活動内容について同氏にインタビューをすることができた。

今回は短い滞在期間だったが、関係者との面談を通じて貴重なお話を伺い、また数多くの関連資料・書籍等を入手することができて、充実した研究調査になった。

第59回現代における宗教の役割研究会(コルモス)研究会議に参加

堀内みどり

12月26日、27日、京都国際ホテルを会場として開かれた標記会議に、澤井義次、金子珠理の両氏と共に参加した。

26日午後から始まった会議では、まず大村英昭会長の挨拶につづき、鈴木岩弓東北大学大学院教授による「震災からの復興にみる宗教の“ちから”」、藺田稔京都大学名誉教授による「地縁・血縁の再発見」の、二つの基調講演があった。

鈴木氏は、2011年3月の東日本大震災以来、被災者の心のケアのために地元の宗教者、医療者、研究者が連携して行ってきた「心の相談室」の活動を踏まえて東北大学大学院文学研究科に設置された「実践宗教学寄附講座」の取り組みについて講演。諸宗教が協力し合い、学び合う環境をととのえ、日本的チャプレンともいふべき専門職(「臨床宗教師」)の育成を行っていること、第1回の研修が10月に行われたこと、設置期限が3年間であることなどについて述べた。

秩父神社宮司をも務める藺田氏は、まず被災地で表面化した宗教文化として、いくつかの発言や事例を紹介し、“いのち”の意味を探り、その上で、家族が“いのち”の復権の拠点であることを指摘した。

藺田氏によれば、神道は民族文化に内在する宗教性に基づく共同体宗教であって、伝統的な家族や親族などの血縁的集団や集落の地縁的集団を単位に多数の自然神や祖先神を祭る宗教文化である。そうした集団が自然として共生し死者たちと交流する神々の祭祀を継承してきたからこそ、「いのち」が個体視された生命ではなく、祖先から継承される霊性であるから、家族は共同して子どもを育て、次代に後生を託して死後の安心を担保できることなどを述べた。そして、家郷喪失の時代から新たな家郷社会の構築という「懐かしい未来」という構想を語った。

27日は午前中に、渡辺順一氏(金光教羽曳野教会長)、板井正斉氏(皇學館大学准教授)、釈徹宗氏(相愛大学教授)、小田武彦氏(聖マリアンナ医科大学教授)によるパネル・ディスカッションが行われた。

各氏の発題内容は以下の通り。

渡辺順一:「痛みの地」で再発見・再創造される「地縁・血縁」  
板井正斉: 孤独なお祭りーいま、地域に求められる神社の役割を<あらためて>考えるためにはー

釈 徹宗: NPO ライフの活動(①グループホーム「むつみ庵」②「ケアプランセンターかんのん」③ALSDのセンター④寺子屋「わだち」)の活動を紹介します。僧侶としての自分の立位置と役割などに言及

小田武彦: いのり 追悼と新生ー宗教者による神戸メッセージ  
午後の全体討議では、フロアも参加して質疑応答があり、最後に島蘭進副会長が総括を行った。

なお、27日のパネル発表に先立って、佐々木正典事務局長から、26日の理事会において澤井義次氏を含む3名が、あらたに研究会員として承認されたことが報告された。また、今回のコルモス会議の参加者は70名だった。